

和歌山県有田郡広川町

和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発



【活動の基本情報】

参加学生数:5 名

(1 年生:3 名、2 年生:2 名)

活動期間:2024 年 5 月～

担当教員:佐々木啓

1. 活動実施の経緯

広川町は、1854 年の安政南海地震で発生した津波が押し寄せた際に濱口梧陵が稲わらに火を付け、津波の襲来を村人に知らせて避難を誘導した逸話「稲むらの火」で世界的に知られる。しかし現状、有田みかん以外に目立ったものがなく、新たな特産品の開発が望まれている。そんな中、広川町の新たな特産物にしようと小麦を栽培する農家が現れはじめており、この小麦を軸として、町内で農産物等を活用した商品開発を行うことを目的に活動を始めた。

2. 活動の内容

- 事前学習:経営学書籍の輪読、商品開発事例および商品開発に関する先行研究の収集
- 現地研修 1:小麦の製粉、ピザ作り体験、町内の観光施設指定管理者(株式会社フラット・フィールド・オペレーションズ)へのヒアリング(9/10-11)
- 現地研修 2:稲むらの火祭りの運営補助、マルシェへの参加(10/19)
- 事後学習:LPP 内での活動報告会(商品開発事例の調査、競合商品「稲むら最中」の分析、商品の案、発売までのスケジュール)

注)本 LPP では、2024-2025 年度の 2 年計画で商品開発を目指している。参加学生は 5 名(1 年生 3 名、2 年生 2 名)。

3. 活動を通じて

- 活動の成果物:商品企画案「広川町に新たな特産物を！～わだいきららフード～」
 1. つゆあかねジャム×スコーン(※つゆあかね:梅×スモモの新種の果実)
 2. はっさく×タルト
 3. はっさく×ベーグル
- 次年度は、町内でのマルシェイベントへ出店し、そこでの商品販売を目指している。

4. 成果ポスター



【2年】大和海、井上華

【1年】森心優、菅田愛理、島津咲希

広川町とは

和歌山県の中央北寄りに位置し、有田郡に属する人口約6300人ほどの町

有名スポット

濱口五稜にまつわる稲むらの火の館や、西広海岸というビーチが夏には多くの家族連れが訪れます

活動内容

2回生2人、1回生3人の計5人で活動しています。小麦を栽培している農家さんと一緒に小麦粉を利用した広川町の特産物を作ろうと考えています。



宿泊研修

9月10,11日に活動メンバー全員で現地へ訪問しました。栽培されている小麦がどういうものなのか、小麦から小麦粉になるまでの過程を実際に体験させてもらいながら学びました。小麦粉を実際に使用した生地からピザを作らせていただいたり、広川町に関わる多くの方とお話させていただいたりしました。貴重な体験ができたとともに広川町という場所の雰囲気を知ることができた2日間でした。

稲むらの火祭り

1854年の安政の大地震による津波の際、濱口梧陵は稲むらに火を放ち村人を安全な場所に避難させ救命活動を行い、村の復興に尽力しました。彼の功績を後世に伝え、地震・津波の防災士気を高めるため、2003年から「稲むらの火祭り」が開催されています。「稲むらの火祭り」では人々が松明を持ち、広川町役場から津波の際の避難所となった廣八幡宮まで行列を行っており、私たちも住民の方々と一緒に行列を行いました。

商品企画に向けて

・ホテル「いさり」レストラン「潮香」
広川町が所有する国の登録有形文化財「旧戸田家住宅」を舞台としたオーベルジュ

・小麦を利用した商品開発



つゆあかね
ブルーベリー
じゃばら
etc...

次年度に向けて

今年度は地域のイベントに参加したり、論文を読み、商品開発の事例研究に取り組みました。来年実際に商品企画を行っていくにあたり、事例研究やアイデア出しに引き続き力を入れていきます！また、一緒に商品開発を手伝って頂く方を見つけるため、人と関わる機会を増やしていきたいです。

4. 2024 年度合同活動報告会の実施

2) 発表の実施報告

本会では、各報告時間に2プログラムずつ、別のエリアで発表を行った。当日の振り返りと報告のため、後日、各プログラムの発表の様子や、アンケートフォームで回収したご意見・ご質問に対する回答をまとめた報告書を参加学生が作成した。

和歌山県有田郡広川町

テーマ:和歌山県広川町の地場農産物を活用した新商品の開発

●報告について

活動報告会には学生5名全員で出席した。今年度からの新規プログラムである広川 LPP は、現地活動3回(うち1回宿泊研修)、通年課題としての商品開発事例の収集など、一年を総じて活動を振り返った後に、1/27 に行った LPP 内部での報告会での内容について話した。最後に、次年度以降の活動で何を意識して取り組んでいくか今後の展望について報告を行った。

広川を知ることにかかってしまい、当初の活動計画通りには進められなかったが、最終的には商品案を発表する段階まで進めることができた。来年度は失敗を恐れず、企画した商品を形にしていき、トライ&エラーの精神でどんどんチャレンジすることを意識していきたい。

●質疑応答

Q.「内部報告会で課題点・改善点について話し合った」その具体的な内容について

A.実際に提案した商品案を簡単に説明したうえで、八朔の季節性や必要コスト・制作方法を今後なるべく早く決定していく必要があるということ。